令和２年度（2020 年度）第１回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会　議事概要

１　日時及び場所

日時：令和２年（2020 年）７月 22 日（水）10 時 00 分から 12 時 00 分まで

場所：湧別町文化センターさざ波　小会議室（紋別郡湧別町栄町 219 番地の 1）

２　出席者

＜構成員：３名＞

熊木俊朗　　東京大学大学院人文社会系研究科教授（座長に選出）

佐藤和利　　紋別市立博物館元館長

岡　孝雄　　株式会社北海道技術コンサルタント地質調査部長

＜竪穴群調査の実施に関係を有する者：２名＞

中島一之　湧別町教育委員会湧別町ふるさと館 JRY 館長

林　勇介　湧別町教育委員会湧別町ふるさと館 JRY 学芸係主任（学芸員）

＜北海道教育委員会：２名＞

村本専門主任（課長補佐代理）　ほか１名

＜傍聴者：３名＞

３　話題提供及び意見交換

＜北海道東部の竪穴住居跡群調査第２次調査計画（総合調査）について＞

事務局が、第２次調査計画で実施する総合調査の方針等について説明した。

・「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」は、世界遺産暫定一覧表候補の文化資産（カテゴリーⅡ）であり、その価値や類似遺跡の比較研究等を通じて事実関係や全体像を把握することで、顕著な普遍的価値を探る必要がある。北海道の歴史や文化の地域性を示すことは、世界遺産の課題だけでなく、一般説明としても必要。

・第２次調査計画では、主に太平洋岸東部の根室・釧路・十勝管内を対象としてデータベースを作成中であり、第１次調査計画で作成したデータベースの修正も同時に行っている。

・かつていくつの竪穴が存在し、現在いくつの竪穴が残っているのか、また、いつの時点まで確認されているのかを把握することが本データベース作成において重視するところ。

・地表面に残る竪穴のくぼみがどのように形成されるのかを考えてみた場合、大中小規模の集落が存在する。選地から集落や住居の設計があり、住居の構築と生活活動があり、廃絶されて埋没するという流れが想定される。

・窪みの利用という点では、最初の選地段階、生活中のくぼみ利用、廃棄時・後の墓などの儀礼的な場としての利用などがある。その後、現在の我々が保護・活用に取り組んでいる。

＜北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」の調査について＞

林勇介氏が、「北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」の調査について」と題して話題提供を行った。

・シブノツナイ竪穴住居跡の立地状況を説明。竪穴群と現海岸線との距離は約 100ｍあり、史跡指定範囲の北側には砂丘列が近接している。遺跡の主体が形成されたと考えられる 10～12 世紀は「平安海進」に相当し、海水面が現在よりも 2.1～2.6ｍ高かったことが指摘されている。本遺跡の立地する段丘に湖沼や河川、海岸線が迫る比較的浅い水辺に囲まれた環境であったと考えられる。

・シブノツナイ竪穴住居跡の調査成果と調査計画として、（１）過去の調査概要、（２）

町教委による近年の調査成果（平成 30～令和元年）、（３）今後の調査計画（令和２年以降）を説明。（１）では、昭和 38 年の米村哲英氏、昭和 41 年の大場利夫氏、平成 27～29 年の北海道埋蔵文化財センターによる調査成果が簡潔にまとめられ、その成果を受けて（２）として、町教委による調査目的が設定されて実施されている。さらに（３）として今後の調査計画が挙げられ、現在の予定では、２基一対の大型竪穴の性格解明や集落の構成単位、年代・季節性などの把握を優先しているところ。

・シブノツナイ竪穴群における牧野及び国有地問題については将来的に範囲を明確にするなど分離できるように調整したい。

・シブノツナイ竪穴住居跡と町内の他遺跡との比較として、シブノツナイ竪穴住居跡、川西２遺跡、川西オホーツク遺跡の３つの竪穴群は同じ舌状台地上にあり、それぞれ 500m間隔で位置している。

・上記３遺跡の竪穴群の存続時期については、シブノツナイ竪穴住居跡と川西２遺跡は、竪穴の平面形状から幅広い年代が考えられるものの、これまで得られた出土遺物から判断すると、擦文文化後期・晩期や続縄文文化後半という限定的な年代に遺跡が形成された可能性が考えられる。また、川西オホーツク遺跡については、オホーツク文化、続縄文文化、擦文文化の複合遺跡である可能性がある。

・将来的には、３つの遺跡を一つの遺跡群としてとらえて調査成果を整理し、公開・活用することが、本地域の歴史を理解する上でも重要。今後も個別調査を進めるとともに、一つの遺跡群としての視点から、調査計画を練り、調査を実施していきたい。

＜意見交換＞

（事務局）

・湧別町教委の調査について、シブノツナイの中で大別的に時期を把握する必要があるのではないか。調査対象も大形竪穴住居の発掘調査だけで十分か吟味する必要がある。また、擦文以外にも、オホーツクや続縄文などはくぼみとして残されているのか、擦文以外の住居はなく、やはり時期が限定されるのかについて調査で明らかにする必要があるのではないか。

・調査計画を年度ごとに見直しても良いので、周辺環境の調査や低湿地の調査の必要性などを吟味する必要がある。

・道教委として要望することとして、包蔵地の保護という観点から牧場との境界を確定させること、また試掘調査によって、地表から竪穴のくぼみが見えない箇所がどうなっているのかを把握することが挙げられる。

・遺跡の内容把握として、シブノツナイ竪穴住居跡のみとするのか、川西オホーツク遺跡や川西２遺跡も含めた三つの遺跡群を国指定の視野に入れるのか検討すること。

・シブノツナイを周辺遺跡と比較する場合、「典型的な」、「代表的な」、「特徴的な」、「独特な」といった文言で整理することを念頭に置いた説明を考えること。

（構成員からの意見）

（佐藤氏からの意見）

・雄武町、興部町、紋別市周辺の竪穴群のまとまりは、おおよそ 50～60 軒くらいのものが多い

・竪穴数の捉え方として、60 軒前後を１単位として存在するのではないか。擦文後・晩期の約 250 年の間、家の耐久性から１軒に８～10 年程度居住している可能性があり、2 軒一組でつくられるとして、250 年÷9 年×2 軒＝56 軒となる。

・シブノツナイ竪穴住居跡の特徴は、その竪穴数の集中にあると思われる。アイヌ集落の構成を考えた場合、津軽一統志にゆうべつ村アイヌ３００人程とあるが、イオル全体での人口で、川の流域に分散して住んでいた。擦文文化にもこの傾向が遡れるのかは要検討で、生業としてのサケ・マス漁などと関連するかもしれない。

（岡氏からの意見）

・環境復元としては泥炭地での調査も必要。地形の形成過程をとらえることや、当時の環境状況や火山灰を位置づける上でも、周辺の泥炭地などを調査して、良好な箇所でいくつかボーリング調査（コアサンプラーおよび検土杖）を行った方がよい。

（熊木氏からの意見）

・道東部網走周辺のオホーツク文化の集落遺跡の傾向として、河口より少し内陸に位置することが挙げられる。栄浦遺跡やオムサロ台地遺跡も同様。最寄貝塚は異なるものの、この地域に一般的な地域的特徴と言えるのではないか。

・オホーツク海沿岸の住居は、密な配置になるのが一般的。目梨泊遺跡は地形の制約からか狭い沢地形となり密集しない。シブノツナイ竪穴住居跡群は、密な配置ということでオホーツク海沿岸域の一般的な特徴を備えている。

・現在、町教委の発掘調査ではトレンチ調査が実施されているが、教育や活用の側面からすると、竪穴住居を一軒完掘した方が情報を伝えやすい。今後、発掘調査計画の中で、検討してもらいたい。

・二軒一対のパターンが当てはまらない可能性も考慮した方がよい。竪穴の配置として、必ずしもこのパターンだけではないことには注意。